11・3県民のつどいに
枠を越えて265人が

こんなつどいは初めてだ 元気が出た

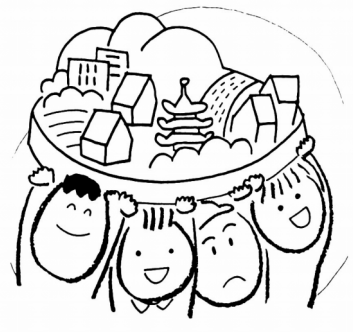
「今日は良かった。いつもとは違う、いろんな人が集まるこんなつどいは初めてだ。元気が出た」。13日の夕方、どの参加者も、すがすがしい顔をして米原公民館を後にしました。「県立高校をつぶすな　11・3県民のつどい」には、これまでの枠を超えて様々な人たちが合流。参加者は265人以上。地域住民111人、高校教職員86人、小中学校教職員31人、障害児学校17人、県会議員５人、市町会議員14人、町長１人、中学生３人が受付を手伝ってくれました。長浜市長と日野町長、日野町議長からはメッセージが届きました。民主党の西澤桂一県議、対話の会の角川誠県議、日本共産党の節木三千代県議の３人があいさつ。

シンポのパネリストは、愛荘町長の村西俊雄さん、長浜市議の押谷憲雄さん、愛知中教員の大月由美子さん、山東町の児玉さよ子さんの４人、コーディネーターは「考える会」の杉原秀典さんでした。杉原さんが、県が統廃合の理由にする「子どもが減少」のトリックを説明した後、４人が実情と思いを語りました。

単純に教育の問題でなく政治の問題だ

村西さん。「愛荘町では、昨年、統廃合で愛知高校の名前が出て火がついた。愛知郡、犬上郡を合わせ６万人のエリアに高校１つだけだ。活力があるなしは学校規模の問題ではない。地域に根ざした高校づくりの効果があり、高校生が町の行事などに参加するようになった。そこに学校があり、みんなが学び、地域の文化、歴史につながっている。親の経済負担からみても、自転車で通える範囲に高校があることが大事だ。これは単純に教育の問題でなく政治の問題だ。」

財政問題は高校をつぶす理由にならない



押谷さん。「６月の議会に意見書を出したが採択されなかった。９月には全会一致で採択された。高校がなくなることは、長浜の町づくりのプラニングには入っていない。『効率的な学校運営』のため１校なくして5000万円、10校なら５億円が浮くという。これで地域の環境をこわしていいのか。財政問題を理由に高校をなくすのはおかしい。若いお母さんが『選択肢が狭まる』と、一生懸命署名を集めている。」

県議会議長宛の新しい請願署名が始まる。12月1日締め切り

公立･私立の併願が減っている　高校に行けない子が

大月さん。「愛知高は授業が落ち着いてできるようになった。小規模校で、高校の先生が頑張り、ＯＢも働きかけているからだ。私立ではなく愛知高へ行きたい子がいる。統廃合になれば私立へも公立へも行けない子が出てくる。最近、受かってもどうせ私立には行かせられないと、公立・私立の併願が減っている。国が35人学級とか授業料の無償化に進んでいるのに、統廃合で学校に行けないのは逆行だ。ＰＴＡの協力で署名600筆が集まった」

「切磋琢磨」は子どもにとって地獄

児玉さん。「自分を表現することが苦手な子には小規模の学校がいい。自分の子どもは、小規模な学校で、学年主任が丁寧にしてくれてよかった。教育委員会は、多人数の中でこそ切磋琢磨ができるというが、子どもにとっては地獄だ。切磋琢磨というのは、同じ志を持った人が励まし合うことだ。競争すればいいのではない。母校をなくして、愛校心だとか郷土を愛するとか、教室で道徳教育をしても意味がない。」

「身内の運動」から「カベを超えた運動」へ

会場からの発言が求められると、次々に手が上がりました。立場の違う人たちが自由に発言し、真剣に聞き合い、発言のたびに、共感の拍手と笑いが湧き起こりました。

この日は、「身内の運動」から「カベを超えた運動」へ、新しい出発の日になりました。この流れを促したのは、地域のつながり、子どもと教育を大事にする滋賀県民の思いでした。

ストップ高校統廃合　速報第35号
2010/11/5 県立高校の統廃合を考える会

TEL 077−522−4965 FAX 077−522−4978

(増し刷りして全教職員に配布し、また掲示板に貼るなどして下さい)